

Serge Tixa 著 奈良 勲 監訳 川口浩太郎, 金子文成, 藤村昌彦,  
佐藤春彦 訳

## 触診解剖アトラス 第3版

福井 勉 (文京学院大学理学療法学)

本書は Serge Tixa 氏の著書『触診解剖アトラス (第3版)』の日本語訳本である。頸部、体幹・仙骨、肩、上腕、肘関節、前腕、手関節・手、股関節部、大腿部、膝関節周囲、下腿部、足関節および足部という12章で構成されている。

本邦にも触診解剖あるいは体表解剖の類書は複数あるが、本書は550ページを超える大著である。骨学と筋学を中心に構成されているが、神経および血管についても記載されている。触診方法の特徴としては、関節を特定のポジションに保持して神経の触診を容易にする工夫や、「性差」について述べられている箇所もある。学習書として第1章から順次読み進めることももちろん良いが、必要な情報が網羅されているため、索引を用いて辞書的に活用することも可能である。また随所に記述されている「クリニカルヒント」は、運動器疾患患者を検査・評価する際に遭遇するさまざまな場面を想定して大変詳細に述べられている。

このような専門書が改訂を重ねていることは、すなわち定評があることを示していると考えられるが、全体を概観すると、そのことをうかがわせる点がさまざまにある。

その一例が写真被写体のモデルの身体である。骨学と筋学での描写が非常にわかりやすい体表面を有していることに加え、触診部位をわかりやすく見せ

る写真を豊富に用いている。触診解剖の専門書としてこの種の写真は読者の理解を深める重要な鍵であると言える。掲載写真の何十倍ものショットから厳選されたのであろうことが推定される。またモデルの身体の背景面、身体の凹凸を際立たせるための照明の素晴らしさも秀でている。さらに、触診部位に応じた被検者と検者のポジショニング(肢位)を選んでいることも読み進めるうちにわかってくる。2次元の紙面であるにもかかわらず、3次元を意識して撮影されている点も本書の魅力の一つである。

触診解剖の技術的洗練度は運動器疾患だけではなく、中枢神経疾患や呼吸器疾患などにも重要なことであり、その方法論を詳細に習得することが求められる。これは、疼痛部位のメカニカルストレスを類推する手段としても有効である。米国版の原書のネット上評価も高く、近年盛んになっている超音波装置による身体の構造把握にも有益である。

本書は、学生が触診解剖書として活用するために十分な内容であるだけでなく、ベテランセラピストが検査・評価方法を再学習する手段にも十分耐え得る深い内容を有している。手元に置いておきたい好著である。

(B5判 頁568 2018年 定価: 本体8,000円+税  
[ISBN978-4-260-03247-6] 医学書院刊)